

# 「城北子どもニュース」の取り組み

～番組作りを通して、メディアリテラシーの育成を図る～

熊本市コンピュータ教育研究会／熊本県本渡市立下浦第一小学校 教諭 上村 孝直

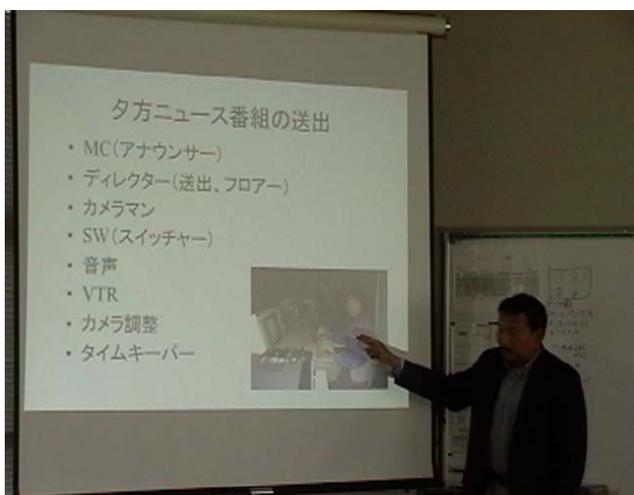
## 1 はじめに

私の前任校である熊本市立城北小学校は、H16年度にKWN（子どもニュースプロジェクト：松下教育研究財団）の支援を受け、5年生で総合的な学習の時間を中心にニュース番組作りに取り組んだ。以下、その概要を紹介する。

## 2 ニュース番組作りの講話

5年生では、国語科で2学期に「インタビュー名人になろう」、3学期に「ニュースを伝える」「伝え方を工夫して発信しよう」を学習する。さらに社会科でも2学期に「わたしたちの生活と情報」を学習する。いずれも、総合学習でのニュース番組作りにつながる内容だ。

そこで2学期の社会科学習に合わせて国語科での学習を前倒しした上で、熊本朝日放送ディレクター山森英雄氏に来ていただき、番組作りに関するお話を直接聞いた。現場で活躍する方の生の話に、みんな熱心に聞き入っていた。山森氏からは、ニュース番組をつくるための具体的なアドバイスもたくさんいただいた。特に「細かい技術的なことはあまり気にしないでいいから、初めに何を言いたいかな主張をはっきりと持ち、よく構成を考え



山森ディレクターによる講話

てから取材をするように」というお話には、子どもたちがしきりに肯いていた。

なお、H17年度版の教科書では国語科の「インタビュー名人になろう」は1学期に、「ニュース番組作りの現場から」「工夫して発信しよう」「編集して伝える」が2学期に配置されているので前倒しは不要で、内容の充実と併せてよりニュース番組作りにつながる内容となっている。

## 3 テーマの設定と構想

次に、ニュース番組にまとめたいテーマを出し合い、それらをグループ化した。私の担任する5年2組では「城北おこめニュース」「『食』について考えたこと」「『ミナマタ』から学んだこと」「よみがえれ八景水谷水源」の4つに絞り込み、グループ毎に構成を考え、絵コンテを描き、取材や撮影の計画をたてていった。

以下、その実際の様子を「よみがえれ八景水谷水源」グループを例に振り返ってみたい。

## 4 番組作りの実際

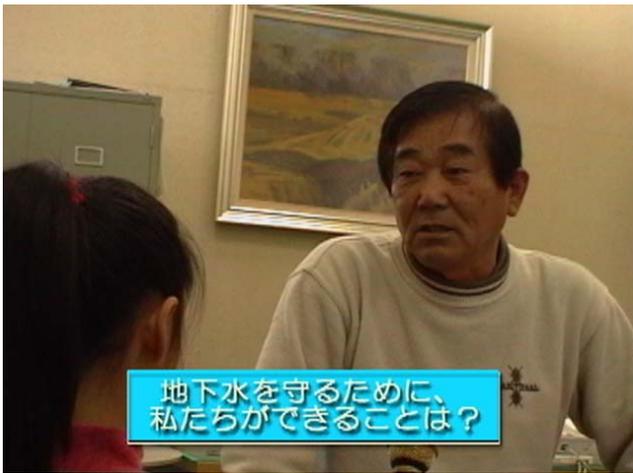
### (1) テーマについて

熊本市は人口60万を優に超える大都市でありながら、水道をすべて地下水で賄っている、世界でも極めて稀な都市である。そしてその水道発祥の地が、校区にある八景水谷水源である。そこには江戸時代に藩主の別邸が置かれていたほど、古くから人々にも親しまれてきた。しかし近年は地下水が減少し、美観も損なわれている。

そこで地下水減少の原因を明らかにするとともに、地下水を大切にすることやそのために自分たちが何をしていったらいいかを考え、それを多くの人にうたえる番組にまとめることとした。

### (2) 資料収集と取材

子どもたちは、すでに4年生社会科で熊本市の水道についての概略を学習している。しかし、それが八景水谷水源と深く関わっているという意識



水の科学館・有田館長へのインタビュー

はあまりなく、八景水谷水源の今と昔についてもほとんど情報を持たない。そこで学校の資料室をあさったり、学級通信などで資料提供を呼びかけたりした。幸い大正時代から昭和40年代にかけての写真が多数見つかり、インタビューに答えてくれそうな人も現れた。八景水源に隣接する「水の科学館」にも取材に協力してもらった。それらに改めて向き合うことで、多くの新たな疑問や気づきを持つことができ、その解決を図る中で学習を深めることができた。

### (3) 番組作りの苦労を体験

日頃何気なく見ているテレビ番組だが、いざ自分たちが撮るとなると、重要なシーンを撮り逃していたり、画面がぐらぐら揺れていたり、マイクのスイッチを入れ忘れていたり、逆光だったりして、なかなかうまくいかないことを実感した。また、何気ないナレーションの一言一言もいろいろな資料にあたって確認しなければならないことや、インタビューで聞きたいことをうまく相手から引き出すことの難しさも知った。さらに、自分たちで間違えずに台詞を言うことがいかに難しいか、そうやって撮ったビデオも肝心の部分が陰に隠れていたり、声が聞き取りにくかったりして使い物にならないことがいかに多いか、などを学んだ。

### (4) 番組の練り上げ

熊本市では「幼小中連携の日」を設け、学期ごとに授業の相互参観を行っている。3学期は城北小が会場となり、多くの先生方を迎えることになった。そこでこの機会に参観の先生方からアドバ



番組の感想を中学校の先生にインタビュー

イスをもらい、よりよい番組に練り上げていくことにした。当日は各チームごとに、自分たちの作った番組の動画ファイルが入ったノートパソコンを抱えて校内を回り、積極的に参観者に声を掛けて番組見てもらい、感想をインタビューしていった。参観者からは、「よく調べていた」「いろいろな人にインタビューしてあった」「地域のいいところに目をつけていた」といった好意的なものがほとんどで、中には「小学生がここまで…」という驚きの感想もあった。また、「節水の大切さを家庭にも訴えるコメントを付け加えたら」という有意義なアドバイスもあり、さっそく取り入れていった。このようにして出来上がった作品が、地元放送局が主催する「ふるさとCM大賞」に入賞し、大いに子どもたちの励みとなった。

=====

## 5 実践を振り返って

体験を通して、子どもたちはテレビの番組が、いかに多くの苦労や工夫によって制作されているか、ということを学んだ。同時に、明確な意図の下に取材対象を選んだり編集を加えたりする中で視聴者に様々なメッセージを伝えていること、視聴者にはそうした「情報とうまく付き合う力の大切さ」が求められていることを実感することができた。

こうして身につけた力をさらに遠隔地との交流学习などを通じて実践化していけるよう、新任校でも取り組んでいきたいと思っている。